

Descriptor Form System の構造可制御性

名大工学部 細江繁幸 (Shigeyuki Hosoe)

早川義一 (Yoshikazu Hayakawa)

1. はじめに

p_1, \dots, p_l を独立なスカラーパラメータとするとき、係数行列が

$$\begin{cases} K_p = \bar{K}_0 + \sum_{i=1}^l p_i \bar{b}_i \bar{k}_i^t & A_p = \bar{A}_0 + \sum_{i=1}^l p_i \bar{b}_i \bar{c}_i^t \\ B_p = \bar{B}_0 + \sum_{i=1}^l p_i \bar{b}_i \bar{d}_i^t \end{cases} \quad (1)$$

$$\begin{aligned} \text{ただし } \bar{K}_0, \bar{A}_0 &\in \mathbb{R}^{n \times n}, \bar{B}_0 \in \mathbb{R}^{n \times m}, \bar{d}_i \in \mathbb{R}^m \\ \bar{k}_i, \bar{c}_i &\in \mathbb{R}^n, p = (p_1, p_2, \dots, p_l) \end{aligned}$$

で表わされる Descriptor Form System

$$K_p \dot{x}(t) = A_p x(t) + B_p u(t) \quad (2)$$

の構造可制御性について考察する。従来の状態方程式系 $\dot{x} = A x + B u$ に関する結果^{(1)~(7)}や、Descriptor Form System における係数行列が構造化行列 (要素が零固定要素と変動要素に類別され、変動要素は互いに独立なパラメータとする行列) である場合の結果^{(8)~(10)}が一般化され、より広いクラスの物理システム

の構造可制御性が判定できるようになる。

2. 準備

まず係数行列がパラメータに依存しない通常の Descriptor Form System

$$\bar{K} \dot{x}(t) = \bar{A} x(t) + \bar{B} u(t), \quad t \geq 0 \quad (3)$$

$x(t) (\in \mathbb{R}^n)$: 中間変数, $u(t) (\in \mathbb{R}^m)$: 入力

$$\bar{K}, \bar{A} \in \mathbb{R}^{n \times n}, \quad \bar{B} \in \mathbb{R}^{n \times m}$$

の可制御性の定義などを与える。微分方程式(3)が一意解を持つためには $\det(s\bar{K} - \bar{A}) \neq 0$ が必要ならぬ。このとき, $(\bar{K}, \bar{A}, \bar{B})$ は consistent であるという。consistent な(3)の形のシステムの可制御性には3つの異なる定義があるが^{(1)~(3)}、ここでは次のものを採用する。

[定義0] ⁽¹⁾ 任意の初期値 $x(0)$ に対し, 滑らかな入力 $u(t)$ ($t \geq 0$) が存在して, 解 $x(t)$ を有限時間で0にすることができるとき, システム $(\bar{K}, \bar{A}, \bar{B})$ は可制御であるという。』

<補題0> ^{(2) (1)} 次の2条件は等価である。

(i) $(\bar{K}, \bar{A}, \bar{B})$ は可制御である。

(ii) $\text{rank}[s\bar{K} - \bar{A}, \bar{B}] = n \quad \text{for } \forall s \in \mathbb{C}$ 』

本稿で考察する(1), (2)式の descriptor form system (K_p, A_p, B_p) に対しても, 一意解の存在を保証する consistency 条件 $\det(sK_p - A_p) \neq 0$ は満たされているものとする。

(K_p, A_p, B_p) の可制御性はパラメータベクトル $p = (p_1, \dots, p_r)$ の値によって変わるが、殆んど全ての p の値に対し可制御であるか、反対に全ての p の値で非可制御であるかのどちらかが定まる。このことから構造可制御性が次のように定義される。
 [定義1] 『パラメータ空間 \mathbb{R}^r に、あるプロパ・バラエティ V が存在し、任意の $\bar{p} \notin V$ に対し、 $(K_{\bar{p}}, A_{\bar{p}}, B_{\bar{p}})$ が定義の意味で可制御であるとき、 (K_p, A_p, B_p) は構造可制御であるという。』

以下、 s および p_1, \dots, p_r の多項式を要素とする行列 $X(s, p) \in \mathbb{R}^{n \times n}[s, p]$ の最大サイズ小行列式全体に対する $\mathbb{R}[s, p]$ での最大共通因子を記号 $\Gamma(X(s, p))$ で表わす。

<補題1> \mathbb{F} 次の3条件は等価である。

(i) (K_p, A_p, B_p) は構造可制御である。

(ii) $\mathbb{R}^r \supset \exists V : \text{プロパ・バラエティ}, \forall \bar{p} \notin V$ に対し
 $\text{rank}[sK_{\bar{p}} - A_{\bar{p}}, B_{\bar{p}}] = n \quad \text{for } \forall s \in \mathbb{C}.$

(iii) $\deg_s \Gamma([sK_p - A_p, B_p]) = 0.$

ただし、 \deg_s は $\mathbb{R}[s, p]$ に含まれる多項式 a の s に関する次数を表わす。』

$\mathbb{R}[s, p]$ の多項式 $f(s, p)$ を s だけの多項式 (定数を含む) $\alpha(s)$, p だけの多項式 $\gamma(p)$, s および p の多項式 $\beta(s, p)$ (s あるいは p だけからなる因子を持たない) の積

$$f(s, p) = d(s) \beta(s, p) \gamma(p)$$

と表わしたとき、これを $f(s, p)$ の s - p 分解と呼ぶ。今後 α, β, γ をそれぞれ f の s -、 (s, p) -、 p -因子と呼ぶ。

$\det(sK_p - A_p)$ の s - p 分解を $a(s)\beta(s)c(s)$ とするとき、

$$\Sigma \triangleq \{ \lambda \in \mathbb{C} \mid a(\lambda) = 0 \} \quad (4)$$

と定義すれば、明らかに

$$\Sigma = \bigcap_{p \in \mathbb{R}^l} \{ \lambda \in \mathbb{C} \mid \det(\lambda K_p - A_p) = 0 \} \quad (5)$$

である。複素数 $\lambda \in \Sigma$ を (K_p, A_p, B_p) の不変モードと呼ぶ。一方、 $t(s, p) \in S$ だけの多項式とみなしたときの零点を p -dependent あるいは変動モードと呼ぶ。不変モードの全体は明らかに $\Sigma_0 = \{ \lambda \in \mathbb{C} \mid \det(s\bar{K}_0 - \bar{A}_0) = 0 \}$ の部分集合をなすが、 $\lambda \in \Sigma_0$ が不変モードかどうかは次の補題を用い判定できる。

<補題 2> \mathbb{R} 次の 2 条件は等価である。

(i) $\lambda \in \Sigma_0$ は (K_p, A_p, B_p) の不変モードである。

(ii) $\exists \mathbb{t} \subset \mathbb{Q} \triangleq \{ 1, 2, \dots, l \}$

$$\text{rank} \begin{bmatrix} 0 & (\lambda \bar{K} - \bar{C})^{\mathbb{t}} \\ \bar{B}^{\mathbb{Q}-\mathbb{t}} & \lambda \bar{K}_0 - \bar{A}_0 \end{bmatrix} < n$$

ただし $\mathbb{t} = \{ i_1, i_2, \dots, i_{\mathbb{t}} \}$ のとき

$$\bar{B}^{\mathbb{t}} \triangleq [\bar{b}_{i_1} \ \bar{b}_{i_2} \ \dots \ \bar{b}_{i_{\mathbb{t}}}] \quad , \quad (\lambda \bar{K} - \bar{C})^{\mathbb{t}} = \begin{bmatrix} \lambda \bar{K}_{i_1}^{\mathbb{t}} - \bar{C}_{i_1}^{\mathbb{t}} \\ \vdots \\ \lambda \bar{K}_{i_{\mathbb{t}}}^{\mathbb{t}} - \bar{C}_{i_{\mathbb{t}}}^{\mathbb{t}} \end{bmatrix}$$

とする。』 (証明はマトロイド理論でよく知られた Rado の定理を用いてできる。詳しくは文献(4)を参照されたい。)

補題1から直ちに次の結果が得られる。

<補題3> 『次の2条件は等価である。

(i) (K_p, A_p, B_p) は構造可制御である。

(ii) (a) $\forall \lambda \in \Sigma$, generic rank $[\lambda K_p - A_p \ B_p] = n$

(b) $\Gamma([sK_p - A_p \ B_p])$ は (s, p) 因子を持たない。』

上の条件(ii)の(a)が成立しないとき、不変モードが非構造可制御、(b)が成立しないときには変動モードが非構造可制御という。

3. 構造可制御性の判定

不変モードと変動モードの可制御性を個別に考察することにより、 (K_p, A_p, B_p) が構造可制御であるための必要十分条件が得られる。

さらに次の補題を用意する。

<補題4>

$$Y(s, p) = \begin{bmatrix} 0 & -I_e & \begin{matrix} s\bar{k}_1 - \bar{c}_1^t & \bar{d}_1^t \\ \vdots & \vdots \\ s\bar{k}_e - \bar{c}_e^t & \bar{d}_e^t \end{matrix} \\ I_e & \begin{matrix} p_1 & & \\ & \ddots & \\ & & p_e \end{matrix} & \begin{matrix} 0 & 0 \\ 0 & 0 \end{matrix} \\ -\bar{b}_1 \cdots -\bar{b}_e & 0 & \begin{matrix} s\bar{K}_0 - \bar{A}_0 & \bar{B}_0 \end{matrix} \end{bmatrix}, Z(s, p) = \begin{bmatrix} \begin{matrix} H_{11} & \cdots & H_{1e} \\ \vdots & & \vdots \\ H_{e1} & \cdots & H_{ee} \end{matrix} & -I_e & 0 & \begin{matrix} H_{10} \\ \vdots \\ H_{e0} \end{matrix} \\ I_e & \begin{matrix} p_1 & & \\ & \ddots & \\ & & p_e \end{matrix} & 0 & 0 \\ -\bar{b}_1 \cdots -\bar{b}_e & 0 & \begin{matrix} s\bar{K}_0 - \bar{A}_0 & \bar{B}_0 \end{matrix} \end{bmatrix}$$

とおく。ただし H_{ij} は伝達関数

$$H_{ij}(s) = \begin{cases} (s\bar{k}_c - \bar{c}_c)^t (s\bar{K}_c - \bar{A}_c)^{-1} b_j & (i, j = 1, \dots, l) \\ -(s\bar{k}_c - \bar{c}_c)^t (s\bar{K}_c - \bar{A}_c)^{-1} \bar{B}_c + d_c^t & (i = 1, \dots, l) \end{cases} \quad (6)$$

を表わす。このとき

$$\Gamma([sK_p - A_p \ B_p]) = \Gamma(Y(s, p)) = \Gamma(Z(s, p))$$

が成立する。 $Z(s, p)$ の要素は s に関しては有理式であるが、その最大サイズ小行列式は s, p の多項式であるので、それらに対する最大共通因子 $\Gamma(Z(s, p))$ が定義できる。』

不変モードの可制御性

補題3の条件(ii-a)および補題4より次の結果が得られる。

[定理1] 『次の2条件は等価である。』

- (i) (K_p, A_p, B_p) の不変モードは可制御
- (ii) 任意の $\lambda \in \Sigma$ に対し

$$\forall \mu \in \mathbb{Q} \quad \text{rank} \begin{bmatrix} 0 & (\lambda \bar{K} - \bar{C})^t & \bar{D}^t \\ \bar{B}^{\mu-t} & \lambda \bar{K}_c - \bar{A}_c & \bar{B}_c \end{bmatrix} \geq n$$

が成立する。』

変動モードの可制御性

補題4の行列 $Z(s, p)$ を用いて変動モードの構造可制御性の条件が導出できるが、それには(6)式で定義した伝達関数 $H_{ij}(s)$ による有向グラフを利用する。

[定義2] 『 $G(K_p, A_p, B_p)$ は節点集合 $N = \{v_0, v_1, \dots, v_l\}$, 有向枝集合 $E = \{e_{ij} \triangleq (v_j \rightarrow v_i) \mid H_{ij}(s) \neq 0\}$, 重み関数 f :

$e_{ij} \mapsto H_{ij}(s)$ から成る重み付有向グラフである。』

[定理 2] [□] 次の 2 条件は等価である。

- (i) (K_p, A_p, B_p) の変動モードは可制御。
- (ii) $G(K_p, A_p, B_p)$ において v_0 から可到達な節点の集合を $R (\subseteq N)$ とする。このとき、 $R = N$ であるか、又は $N \neq R$ ならば、 $G(K_p, A_p, B_p)$ の $N-R$ に関するセクション部分グラフ⁽¹⁵⁾ に完全に含まれる任意のサイクルの重み積は s を含まない。』
(証明は文献 [4] を参照されたい。)

参考文献

- [1] C. T. Lin: Structural Controllability; IEEE Trans. Auto. Contr., AC-19-3, 201/208 (1974)
- [2] R. W. Shields and J. B. Pearson: Structural Controllability of Multiinput Linear Systems; IEEE Trans. Auto. Contr., AC-21-2, 203/212 (1976)
- [3] K. Glover and L. M. Silverman: Characterization of Structural Controllability; IEEE Trans. Auto. Contr., AC-21-4, 534/537 (1976)
- [4] S. Hosoe and K. Matsumoto: On the Irreducibility Condition in the Structural Controllability theorem; IEEE Trans. Auto. Contr., AC-24-6, 963/966 (1979)
- [5] H. Mayeda: On Structural Controllability Theorem; IEEE Trans. Auto. Contr., AC-26-3, 795/798 (1981)
- [6] J. P. Corfmat and A. S. Morse: Structural Controllable and Structural Canonical Systems; IEEE Trans. Auto. Contr., AC-21-1, 129/131 (1976)

- [7] B. D. O. Anderson and Hui-min Hong: Structural Controllability and Matrix Nets; Int. J. Control 35-3, 397/416 (1982)
- [8] 青木, 糸江, 早川: 中間標準形で記述されたシステムの構造可制御性; 計測自動制御学会論文集 19-8, 628/635 (1983)
- [9] 松本孝裕, 池田雅夫: 中間標準形で表わされた系の構造可制御性; 同上, 19-8, 601/606 (1983)
- [10] 室田: 補助変数をもつ線形時不変系の構造可制御性; 同上 19-2, 104/109 (1983)
- [11] E. L. Yip and R. F. Sincovec: Solvability, controllability, and observability of continuous descriptor systems; IEEE Trans. Auto. Contr., AC-26, 703/707 (1981)
- [12] 早川, 糸江, 伊藤: 中間標準形方程式系の動的次数と可制御性; 電子通信学会論文誌, 64-A-9, 752/759 (1981)
- [13] G. C. Verghese, B. C. Levy and T. Kailath: A generalized state-space for singular systems; IEEE Trans. Auto. Contr., AC-26, 811/831 (1981)
- [14] 青木, 糸江, 早川: λ -行列に属する Descriptor Form における構造可制御性; 電気学会システム制御研究会資料, SC-83-22, 117/136 (1983)
- [15] 尾崎他: グラフ理論, コロナ社 (1975)